

マルサスからヒューウェルへの 4 通の書簡*

山 崎 好 裕**
(翻訳)

書 簡 1

東インドカレッジ 1829年 5月26日

「経済学のいくつかの命題の数学的表現」¹と題する論文をお送りいただいたことに感謝しております。私は論文をたいへん興味深く拝読しました。しかし、私が現代の代数的表現法に慣れ親しんでいないために、また、全くそれらに触れることなく長い年月を過ごしてきたために、思いのほか内容を理解できませんでした。大学の試験期間中でもあり、私が通常持っている以上の関心や配慮を払えなかったことも理由です。

私は、しかし、貴方が全く正しい結論に達していると思いますし、私のこれまでの知見からしましても、数学的計算を経済科学に持ち込むことは多いに有意義なことだと推測します。仮定が異なれば、事物が影響を受けるその

*ケンブリッジ大学トリニティ・カレッジのヒューウェル文書。

**福岡大学経済学部。

¹ ヒューウェルはこのパンフレットによって、古典派経済学の完成者と言われるリカードウの体系について最初の数学モデルを構築した。

度合いが異なることの程度を確定する場合に特にそう言えるでしょう。それでも数学の実際利用という観点からすると、難しさはこれから十分に真理に近づくべく分析をする、入手したデータそのものにあります。そして、それは数学的言語で明確に述べるようなものです。人がはっきりした結論に達しようとしている多くの場合において、これは実現不可能なように私には思えるのです。確かに私は、経済学の結論の多くが最大化・最小化といった問題によく似ていると思ってもきました²。これは、土地財産を大きく小さくもなく最もうまく分割するとか、(富が恒常的に増加する状況で)資本の生産物が資本家と労働者で分割される、最も成長促進的な比率は何か、というような話です。しかし、こうした命題がどうしたらまとまりのない解答を正しく表す言葉に直せるか、私には分かりません。その解答自体、土地の肥沃さや資本の生産性によって結論が異なれば異なるでしょうから。

貴方が論文で論じられている諸論点に関して言えば、私より手際がよいと思います。貴方の公理のすべてが、十分に一般的ではないとしても恐らくそのようなのです。貴方の第3論文では労働の節約ということが扱われていますね。そこでは土地の生産物の価値を増加させることなく新しい土地が耕作されず³。そして、貴方の第4論文は一定の供給に対して需要が増加する場合が扱われています。生産費がそれに基づいて決定される土地の制限性を仮定せずに、これらの結論に達し得ないと私は思います。しかしこの、そして、トンプソン氏の論文⁴の後半の諸結論は、挙げて地代の新理論に属するものであり、トンプソン氏自身が初めてそれと取り替えた真実理論と呼ばれるもの

² マルサスはここで、後に経済学の定義として有名になった制約条件付きの最適化問題の内容に言及しているわけである。しかし、書簡4で見ると、マルサスは古典派経済学を定義付けることに極めて慎重であり、ここでも数学的定式化にかなり限定的な条件を付けている。

³ 労働価値説を根底に持つ古典派経済学では、労働投入量が増加すれば生産物の価値が増大するが、労働生産性の上昇があればこの限りではない。

ではありません。すなわち、そこからハンガリーの高級ワインであるトカイの価格が出てくるような独占の場合です。これがその問題の通常の見方であり続けていました。リカードウ氏が言及している私の元の著作が特に目指したのは、通常の地代と、トカイの葡萄畑のような全面的で厳密な独占が生み出す地代とをはっきり区別することでした。私は、地味の異なる土壤が連続的にあることは、地代の存在にとって必ずしも必要ないという点で、トンプソン氏に全面的に同意します⁵。そして、そのことは、トンプソン氏がそれについて書くずっと前に、私自身が印刷物で繰り返し表明していたことなのです。もちろん、実際には地味の異なる土壤がすべての国に見られるために、

⁴ ペロネット・トンプソンの『地代の真実理論』を指している。トンプソンは、リカードウが土地の肥沃度の制限性だけを根拠に地代の発生を論じたことを非難し、高級ワインの生産地の例をあげてより一般的な結論を導こうとした。土地の生産物に対する需要がその供給を上回っているところでは、常に地代発生之余地はあるというのである。

実は、リカードウの最初の数理モデルを作ったヒューウェルは、経済学方法論の面ではリカードウの演繹主義を全面的に排除しようとする急先鋒でもあった。そこで、演繹の過程の一面性を批判するためにトンプソンの著書を好意的に取り上げていたのである。

以下、マルサスによるリカードウ地代論の擁護が続く。

⁵ 最も一般的に言って、確かに供給が制限されているときに需要が十分にあれば、地代が生じる余地があると言っていい。訳注図1は、高級ワインなどある生産量以上が生産不可能な場合の市場の需給の状況を示している。こうした状況では供給曲線はある生産量のところで垂直になり、それ以上の供給ができないことが示される。必需財である小麦とは異なり、マルサスも言うように高級ワインに対する需要は富裕な消費者の需要スケジュールに従うから、需要曲線も通常のそれと同じように右下がりである。供給曲線が右上がりになる数量を超えて需要があると、図のように垂直な供給曲線に沿って価値が上昇していく。こうして高級ワインの市場価格も高騰するが、高級ワインの畑を借りている農業資本家はこれによって超過利潤を手にする。これを見た他の農業資本家は、地主に対して地代を払っても自分に貸してほしいと交渉を始めることになる。こうして地代の競り上げ競争が始まり、結局超過利潤が消滅するところまで地代が押し上げられていく。

税金や10分の1税に関連する全ての現実問題は、そのことによって基本的に調整されなくてはなりません。私自身リカードウ氏に度々言ってきたように、農産物への課税や10分の1税は一定の品質を持つ土地を耕作から投げ出させたり、それらが耕作され続けることを妨げたりし、そのようにして地代に課されることになると、トンプソン氏が言っていることはほとんど正しいのです。他方で、供給が税金に影響されないならば、それが消費者に課されることは火を見るより明らかです。ですが、これらの問題をトカイの葡萄畑に適用することは全く以ってできません。小麦がほぼ現在通りの量で供給されるためには、小麦が現在の価値を持つことが不可欠です。しかし、トカイは、現在よりはるかに低い価値であっても現在と同じ量が供給され続けることになるでしょう。小麦の価値が持続的に上昇しないのは、小麦が需要者にとって必需的な食糧であるという環境によって厳密に制限されているためです。これに対して、トカイの価値の上昇には、ごく一部の消費者の富や気紛れから来る限界以外になんの制約もないのです。ですから、この比較は残念なものだったと言わざるを得ません。そして、トンプソン氏がこのことに拘泥していたなら、論文は現実の状況に全く適用できないものだったでしょう。優良地に投下される資本が劣等地の2倍、3倍、4倍に及ぶと考えることができるでしょうか。逆の場合だってあるのではないのでしょうか。ところで、貴方は、リカードウ氏は賃金課税が労働者に帰着すると考えていると、ついうっかり述べていらっしゃるんですね。リカードウ氏が言っているのは、それが利潤に帰着するということですよ⁶。もちろん、そうした過ちは、あなたが経済学に数学を適用して行った描写の素晴らしさに、なんら影響を与えるものではありません。乱筆にて取り急ぎ。

⁶ リカードウ体系、あるいは基本的に古典派経済学では、実質賃金が生存水準になるように人口法則が働くため、税金が賃金に実質的に転嫁されることは不可能である。

書簡 2

東インドカレッジ 1831年2月28日

富の分配に関するジョーンズ氏⁷のご労作を最近拝受いたしました。たいへん感謝申し上げます。たいへん興味深く拝読いたしましたし、筆者が主題に多大な思索と才能を注ぎ込み、私とリカードウ氏とに意見の相違のあるほとんどすべての点について、ご同意くださっていることに特に感謝申し上げます⁸。しかし、筆者はどのようにして、持続的蓄積、人口増加、耕作の進行がその土地の利潤や穀物賃金を引き下げる傾向をしぶしぶ認めるとき、どうして真理の先まで行こうとしなかったのでしょうか。そして、もし筆者がこの主題についてこれでもう完了したのであれば、最も面白くて重要な分野の一つの起源と進行について考察し損ねたと感じずにはいられません。それは、古い先進国の知識や慣習が、アメリカ合衆国や、私たちの世界の新しい部分を埋めつつある植民地からの独立国の、無垢で肥沃な土地に適用される場合です。これらの場合は、旧世界で支配的であるように、利潤が10%減少したり、穀物賃金が大幅に減少したりすると考えてはなりません⁹。アメリカ合

⁷ リチャード・ジョーンズの『富の分配と課税の源泉』を指している。ジョーンズはヒューウェルの盟友であり、古典派経済学に帰納主義を全面的に導入するために攻撃的な論陣を張っていた。

⁸ 古典派経済学は親友でありライバル関係にもあったリカードウとマルサスの論争を通じて発展し、完成に導かれたと言っている。その際、ほとんど数理モデル寸前の論理的・演繹的な展開を行うリカードウに対して、マルサスは実際的にも、また当時の人々の目にも、アダム・スミスにあった総合的・帰納的な方法論を守り抜こうとしたように見えた。このため、古典派経済学における帰納主義的方法論の積極的推進者であったヒューウェルとジョーンズはマルサスに親近感を持ち、マルサスの支持を求めて多くの論文や著作をその都度送っていたのである。

衆国では、穀物賃金が我が国の2倍を超えていることははっきりしています。他方同時に利潤率もはるかに高いのです。これらの高賃金や高利潤が低下することが、合衆国が全て耕作され植民されることの絶対的必要条件であることはもはや明らかです。我が国で農業労働者が毎年9クォーターではなく20クォーターの小麦の価値を受け取るべきであるなら、現在耕作されている土地のかなりの部分で耕作を維持するのが全く不可能になるでしょう。新しい植民地での利潤と賃金に関して言えば、それらが徐々に下がることによって、農業経営の在り方が改善されなくても地代がかなり増加できるようになっています。これに対して、私がこれまでそれについて述べてきたような旧世界の国々では、利潤も賃金も高くないため、利潤や賃金を減らすことによって地代を増やせる余地は極めて少ないのです。そこでは、地主の所得はほとんどすべて農業技術の改善でもたらされているのです⁹。地代が増加しているのに伴って利潤と賃金が減少しているところであっても、それを単に地主への移転と考えるのは誤りです。そのことはいつも資本と生産の増加を伴っているのです。事実、農業技術の改善を伴わない時期を考えれば、それはもちろん私たちが考慮に入れるべきケースなのですが、資本と生産の増加は耕作

⁹ 穀物賃金とは実質賃金が支配できる穀物量のことである。古典派経済学のマクロ的均衡状態では実質賃金が生存水準に一致することになるが、これは生存水準から離れた実質賃金が労働人口の増減を促すことを通じてである。であるから、マクロ的均衡以外での実質賃金あるいは穀物賃金は、労働市場における需給の状況によってマクロ的均衡水準よりも高かったり低かったりする。ここでの記述の前提は、新世界では労働不足の状態にあるため、現在の穀物賃金が生存水準よりはるかに高い水準にあり、これが新世界の人口増大を促すことで耕作が進行し、地代の押し上げと利潤の削減、また同時に穀物賃金の低下を促すであろうという展望である。

¹⁰ リカードウは利潤率の低下によって旧世界の経済成長が停止するのを防ぐために、イギリスは大陸や新世界から廉価な小麦を輸入して、イギリス国内の制限された土地の耕作がさらに進展することを止めさせることが必要だと考えた。ここでマルサスは生産性の上昇について言及している。

の拡大と農業の富の増大の必要条件なのです。もし、耕作の進展と人口の増加が傾向として穀物賃金を減らさないのであれば、どんな原因で新たな植民地の人口増加率を減らすのか分かりません。私は、ジョーンズ氏の、異なった国と異なった時期に異なった種類の地代が一般的であるという説明がとても気に入っています¹¹。新たな植民地での地代が、未成熟な独占や劣悪な政府によって中断されずに進展することは、ヨーロッパのより発展した国々で農民が支払う地代同様に、最も重要な主題の一つです。それはとりわけ私たちにとって、この移民の時代では特に重要なのです。

土地に投下される補助的な資本が農業人口を減少させ非農業人口を増加させるという、ジョーンズ氏の見方はとても優れたものです。廉価な製品を作っている製造業が穀物賃金の維持に貢献していると言っているところもそうです¹²。尤もそのことはさして新しい指摘でもありませんし、少しばかり行き過ぎているところもあるのですが。

私が理論の支持者に恵まれていないとジョーンズ氏が言っているのは全く持ってその通りです。私は彼には分かっていると思います。私が自分自身の人口と地代の原理から導いた一般的で現実的な結論が、私の読者たちが抱いているような憂鬱な内容を持っていないということ。

ジョーンズ氏の著作の残りも一刻も早く読むつもりです。貴方が私の謝意を伝えてくれますように。

¹¹ ジョーンズはリカードウの差額地代論を批判するために、新世界を含む世界各地の地代の現状とその発生原因を列挙し、イギリスなど旧世界で見られる差額地代は世界的に見た場合例外的なものであると述べたのであった。マルサスはこれに対し、リカードウの差額地代論の経済法則としての普遍性を主張して対抗している。

¹² 実際には、労働者の消費バスケットは穀物だけから構成されているわけではない。そのなかには工業製品である必需品も含まれている。このため、そうした必需品の生産性が上がれば、労働者は廉価な必需品を購入できるようになり、貨幣賃金が一定の状況下で実質賃金は高く維持されるわけである。

ところで、私は最近『英国批評』に載った、ライルの地学についての書評を読みました。貴方の手になるものと聞いています。それはとても魅力的で勉強にもなり、そしてもう一つ、同じくらい興味深いものでした。

書簡 3

東インドカレッジ 1831年 5月31日

講義期間が終わり、私は試験の答案に目を通すのに多大な時間を割かねばなりません。そのため、あなたのたいへんなご労作¹³に、それにふさわしい時間をかけることがまだできないでいるのです。しかし、家を出るや否や、そのご論考について貴方に謝意を伝えざるを得ません。私には代数的な表現を読解する習慣はなかったのですが、慌ただしく読ませていただいて判断する限り、貴方ご自身が提起した点をはっきり明瞭に示しているように見えます。貴方も言っているように、大きな困難があるのは公式に関してなのです。しかし、それはまだ、証明の過程にいかなる過ちも潜り込まないようにすることが重要である、といった類いの問題です。リカードウ氏も過程から結論を導く際に必ずしも間違いを侵さなかったわけではないということを考慮する必要がありますでしょう。外国貿易と貴金属の価格について、貴方はリカードウ氏の命題を正しく理解していると思います。ただし、その命題は彼のものである以前に私のものなのですが。私が拙著の注でその一般的な原理について書いた後、私たちはよくその主題で議論したものです。リカードウ氏が著作を出版したのはその2年後でした。貴方もお気づきの通り、私は、ご著書で言及されている効果が単に製造業の技術だけでなく、特定の国の輸

¹³ ヒューウェルの「リカードウ氏の『経済学および課税の原理』における主要命題の数学的説明」を指している。

出財に大きな比較優位を与える全ての原因に依存していると考えます。現在この比較優位はアメリカ合衆国に保有されており、輸出資源の豊富さから来ているものです。いかなる国も労働の貨幣価格を、貿易で結びついた他国よりも高いままに保持することが不可能なのは明らかに思われます¹⁴。農業、工業、植民地経営など何らかの能力によって、隣国よりも少ない労働で貴金属を買えない限りは、です。様々な原因のために、貴金属の流入に伴って物価が上昇するかも知れません。その原因とは例えば、労働の希少性、貨幣の流通速度が高まること、紙幣の発行などです。しかし、自然のものであっても獲得したものであっても、固有の優位性が働かなくなる限りは、貿易によって物価は直ぐに下がることとなります¹⁵。紙幣が兌換可能であれば、貴金属の流入につながる原因なしに紙幣の増発は起こりません。紙幣の発行自体がこうした流入を妨げることになるのですが、それが物価に関する問題を本質的に変えるのかどうかは分かりません。しかし、通貨量の増加に関して何か特定の結論が導けないのははっきりしています。そもそも、いかなる国についても流通に必要な通貨量を定めることは、単に難しいだけでなく絶対的に不可能だからです。全ては相対的なものであり、他国との貿易に依存しているのです。

私が経済学でなし得たことについて、ジョーンズ氏と貴方が下した判断に、私はとても満足しています。実を申しますと、私がリカードウ氏との見解の相違において孤立しており、化学の新発見の真只中であつたプリーストリー

¹⁴ 現在の中国における貨幣賃金の上昇にも見られるように、最初は低賃金を利用して比較優位のある製品の輸出を行うが、やがて労働需給が逼迫することで貨幣賃金の上昇が始まる。外国貿易には賃金水準を均等化する効果があるわけである。

¹⁵ 貿易黒字が貴金属の流入をもたらすと国内物価が上昇する。しかし、これによって輸出品の国際競争力が弱まるため、貿易赤字と貴金属の流出がもたらされて物価水準は低下していくことになる。

氏に例えられたとき、最終的にはそうではないと感じておりました。それでも私は、極めて短い時間の間に、「リカードウ氏の業績で初めて提起された原理で現在正しいと確証されたことがあるかどうか」ということが経済学クラブにおける問題の一つになることを、ほとんど予想していませんでした。私の現在の理解では、大勢はリカードウ氏に厳し過ぎるようです。また、私は、ジョーンズ氏も、それとは違うものの少し誤ったコースを辿っているように思えます。地代増大の唯一の原因として農業資本の収穫逓減について考えた際に、リカードウ氏が全面的に間違っていたということを示したいという情熱のあまり、確かにそれはそうなのですが、ジョーンズ氏は、限定された空間のなかでは、農業や工業の技術改善で妨げられなければ、そのような収穫逓減という自然な傾向があるという、疑う余地のない真理をも否定する傾向があるようです。もしそのような傾向がないなら、そして、そのような傾向が頻繁に働いていないならば、なぜ新しい植民地で資本が蓄積され、最初に占拠された土地に投下され続けるのか、アメリカの東部諸州の住人が今あんなにもたくさん西部に移住しているのか、について、適切な理由が見当たらないことになるでしょう。収穫逓減の傾向が一般的な原理であることは間違いありません¹⁶。それは、古い諸国において、賃金と利潤がある点まで低下した後で、私が述べたように、地代が技術改善によって増大するかもしれないとしても、です。たとえば、賃金と利潤がとても高い状態を考えましょう。よく繁栄している新しい植民地では見られることですが、それらは人口増大と耕作の進展によって低下していくでしょう。それ以上に私が信頼を置く真なる命題はありません。たとえ、いかなる国においても、実質賃金が多額の大家族にも困難をもたらさない程度に高いとしても、また、高利潤からの資本蓄積がこれらの賃金を払うのに事欠かない程度に速いとしても、その国がそのままやっていき、多くの人口で繁栄するには、賃金・利潤双方の相当程度の低下は不可欠でしょう。そして、その低下はやがてもちろん地代に

も及びます。観測された自然法則からしますと、すべての動植物は、なんらかの困難によって妨げられなければ、幾何級数的に増えていくのですから。急いで書いた長文の手紙、ご容赦ください。明日参ります。お会いできるのがとても楽しみです。

¹⁶ これまでの訳注でも見てきたように、マルサスはヒューウェルやジョーンズの攻撃からリカードウの差額地代論を守ろうと努力している。

訳注図2は土地の肥沃度が3段階に渡っている場合の差額地代の発生状況を説明している。もっとも肥沃な土地が耕作され尽くすと穀物をそれ以上提供できなくなるため、次の等級の土地へと耕作が広がっていく。地味が全く異なっているから、必要な限界費用は階段状に高まり、図に見るように最初の等級の土地の供給曲線との間に階段状の段差ができる。やがて、2番目の等級の土地も耕作され尽くすと最も劣等な土地まで耕作が進むが、やはり先ほどと同様に供給曲線には段差が付くことになるのである。

訳注図2の垂直な直線が穀物の需要曲線である。高級ワインのときは異なり需要曲線が垂直になるのは、穀物が必需財であり人口によってその需要が一義的に決定されるためである。穀物の価値は階段状の供給曲線と需要曲線の交点の高さになるが、その場合、上から2番目の等級の土地と最優等な土地を借りている農業資本家は超過利潤を得ることになる。それを見た他の農業資本家は高い地代を払ってもより優等な土地を借りようとするから地代の押し上げ競争が始まり、最終的には最優等な土地、2番目の等級の土地で超過利潤が得られなくなるところまで続く。

図では、最優等地の地代が一番下の点線と一番上の点線との垂直方向の距離として、2番目の土地の地代が真ん中の点線と一番上の点線との垂直方向の距離として示されている。

こうした旧世界のイギリスで成り立っていると考えられる差額地代の状況に、新世界の諸国の状況も経済発展や貿易を通じて接近していくことを、マルサスはリカードウ擁護論として主張しているわけである。

書簡 4

東インドカレッジ 1833年4月1日

一般にそう思われているように、そして当然のことですが、本が送られてきたことを知ったらすぐに、読む前に価値のある贈り物に謝意を呈するのは、最も熟慮された賢明な行動でしょう。あなたにはお分かりのように、私はこの瞬間までそのようにしておりません。そして、その理由は私が、熟読によってこそ、喜びと利益を得ましたと心底述べられるであろうことを強く確信していたからです。この点についての私の予想は実にはっきりしています。そして私は、ご業績の多くの場所をうれしく読み、また教わりもしたということ、はっきりとあなたにお伝えすることができます。ご著書¹⁷のいちばん初めの部分は残りの部分ほどはよくないかもしれませんが。しかし、大方は素晴らしいものです。そして、あなたはご自身の目的に沿った優れた論考をご提起なさり、それをとても卓越した驚くべきとやり方で整え、適用したと私には思われます。よく考えられた証明はいたるところで明瞭ですので、ペイリー¹⁸によって述べられたところのいわゆる論証力に付けくわえられることはほとんどありません。しかし、自然の持つほとんど無限の多様性が与えてくれるところの新しい説明、それはあなたによって豊富に示されているものですが、それらについて熟考することでもっと魅力的になるかもしれません。いつも完璧には他と区別できない、同じ主題の諸部分をたくさんの枝葉に分けることで、あなたが可能な限りの速さで著作を出されたことは正しいことでした。しかし、そこには、考察や説明がぶつかり合う危険性もありま

¹⁷ ヒューウェルが著した『天文学と一般物理学：自然神学に言及しつつ』を指している。

¹⁸ 『自然の見方』の著者であるウィリアム・ペイリーのことである。

す。私の家内は、あなたの作品がそれに値する称賛に、彼女の証言も付け加えてほしいと言っています。彼女はとても楽しんで読んだようです。

あなたがジェレミー氏¹⁹を通じて送ってくださったご業績²⁰について、正直を言うと最初ちょっとおやつと思いました。そして、それが私の経済学上の定義²¹についての攻撃であると思ったのです。私はその定義が無意味であると思いません。もちろん、真実に至るためにいつも用語の新しい定義が必要であるという点で私はあなたに同意します。もっとも正確な定義が、私た

¹⁹ トリニティ・カレッジの卒業生で当時講師であった人物。

²⁰ ヒューウェルの論文「定義の使用について」を指している。

²¹ マルサスは経済学の定義に関する著作も著しており、そこでは経済学が有用で効用をもたらすものの生産と分配に関する議論として定義されている。既に訳注で繰り返したように、ヒューウェルとジョーンズは経済学を帰納科学にすべきであるという主張から、この経済学の定義についての議論も行っていた。

ヒューウェルは演繹の方法の重要性を認めつつも、その手続きが有効であるのは既に帰納が十分に行われた分野においてのみであり、経済学はまだ徹底的な帰納が必要な段階にあると考えていた。この観点からするとリカードウ経済学の誤りは、徹底的な帰納を経ていない命題を前提に、そこから演繹で数々の結論を導いていることにある。

この論戦は、戦後アメリカの経済学界で経済学方法論を巡って戦われたフリードマンとサミュエルソンの論争に似ている。フリードマンは演繹の基礎に置かれる仮定の現実性は全く問題でなく、そこから導かれた諸命題を現実のデータで検証した場合に、実証可能であるかどうか重要であるという「実証経済学」の方法論を展開した。彼の立場は、理論的仮定はむしろ非現実的なまでに単純なものであることが望ましいというものですらあった。

これに対してサミュエルソンは、フリードマンの方法論をFツイストと揶揄し、仮定の現実性を何らかの方法で検証する作業は欠かせないとした。

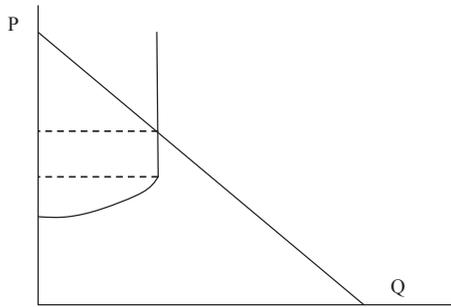
もちろん、リカードウはFツイストの立場に与するものではないだろうが、ヒューウェルは現実的な諸前提なり諸公理を帰納によって導くべしというサミュエルソンの立場からリカードウを批判しているのである。

マルサスの立場は、リカードウの論理志向に対しては複雑な現実を踏まえた反論を与えつつも、ヒューウェルらの帰納原理主義にも諸手を挙げては賛成できない、というものであったと推測される。

ちの知識の進歩の原因というより結果であるという点でもです。ただ同時に、後者に関しては、それらは互いに作用・反作用をしており、知識の進歩に使われる用語の意味について、何らかの理解なしには進歩はゆっくりしたものになるだろうと言わざるをえません。それは、あなたが到達した定義が最高のものだとしても、です。大きな進歩には時間がかかります。あなた自身、自分が有用と思ういくつかの定義に言及されていますね。しかし、それをもっと完璧な他の定義に席を譲ることになるかもしれません。アダム・スミスの業績に基づいている経済学では、諸事実が分類されてきましたが、それには私たちが呼び、議論するときの名前が必要です。私が主にやってきたことは、アダム・スミスが紛れもない意味で使っている名前に従うことでした。あなたも間違いなく、人々を説得するときに、同じ用語を同じ意味で使うことの有用性について、私の合意してくださるでしょう。あなたが攻撃したいのは私ではなくウェイトリー²²だと思います。ですから、紙幅もないようですし、これ以上は言いません。こちらにお出でになるときはぜひお会いしましょう。家内もよろしくと伝えてください、とのことです。

²² マルサスはここで、著書『論理の諸要素』におけるリチャード・ウェイトリーのことを言っている。

脚注付図1



訳注付図2

